

名古屋 文化情報

2015
7・8
July / August

No. 363

NAGOYA
Cultural
Information

随想／福和 伸夫（名古屋大学減災連携研究センター長・教授） 視点／サロンの演奏会のありかた
この人と／久野 利博（造形作家・名古屋芸術大学教授） いとしのサブカル／すずき めぐみ（陶芸作家・コーディネーター）



2015

7・8

July / August

Contents

名古屋市民文芸祭 受賞作品…………… 2

随想 まちの地形と災害
福和 伸夫(名古屋大学減災連携研究センター長・教授)…………… 3

視点 サロンの演奏会のありかた…………… 4

この人と…
久野 利博(造形作家・名古屋芸術大学教授)…………… 6

ピックアップ 同人誌は新しい…………… 10

いとしのサブカル
すずき めぐみ(陶芸作家・コーディネーター)…………… 11

おしらせ…………… 12

「なごや文化情報」編集委員

- 倉知外子 (現代舞踊家)
- 酒井晶代 (愛知淑徳大学メディアプロデュース学部教授)
- 田中由紀子 (美術批評/ライター)
- はせひろいち (劇作家・演出家)
- 米田真理 (朝日大学経営学部准教授)
- 渡邊 康 (椋山女子大学教育学部准教授)

表紙

作品

Thanks mom!・自画自参シリーズ
「花火花」

(1963~2007年/クレヨン、紙/91×127cm)

ぼく自身が子どもの頃に描いた絵を実際に用い、現在の自分がその世界を描き広げていくシリーズ「Thanks mom!・自画自参」を、2007年から展開しています。

子ども時代、飽きてしまったオモチャに花火を向けて「コーゲキだあー」なんてやっていました。今、世界中にある、どうにもならないどうしようもない花火。いつか消える日はくるのでしょうか。



「子どもの頃に描いた絵」

小島 久弥 (こじま ひさや)

- 1957年 名古屋市に生まれる
- 1979年 大阪芸術大学芸術学部美術学科卒業
- 2005年 L gallery 開設
- 2012年 コレクション展 Organic Form 豊田市美術館/豊田
- 2014年 コレクション展 I 透過と反射 金沢21世紀美術館/金沢
- 夏休み子どものプログラム 2014「あっち? こっち? どっち?」豊田市美術館/豊田

「2014年 名古屋市民文芸祭」

(第六五回名古屋短詩型文学祭)小・中学生の部
俳句の部 受賞作品より ※受賞時の学校・学年で掲載しています。

◆市長賞◆ 名古屋市立今池中学校3年 太田 菖

息つめて咲かす線香花火かな

◆市会議長賞◆ 瀬戸市立水野小学校3年 中尾 桜子

竹馬にのれた春の日まぶしいよ

◆市教育委員会賞◆ 幸田町立南部中学校2年 赤木 竜也

雨蛙腹をさすると目をつぶる

◆市文化振興事業団賞◆ 名古屋市立津賀田中学校1年 加登 彩乃

桜東風ブランコ揺らして遊んでる

◆名古屋短詩型文学連盟賞◆ 名古屋市立富士中学校2年 高取 麗子

洗い髪束ねて軽し夏休み

◆中日賞◆ 名古屋市立今池中学校3年 嵐田 創太

いわし雲いつまでたっても僕の上

随想

まちの地形と災害



ふくわ のぶお

福和 伸夫(名古屋大学減災連携研究センター長・教授)

1979年、名古屋大学工学部建築学科卒業。名古屋大学先端技術共同研究センター教授などを経て、2012年から名古屋大学減災連携研究センター長・教授として、安全・安心な国・地域を実現するために災害軽減についての研究を行っている。

日本文化は、数多くの災害を経験する中、自然との折り合いの付け方を文化にした災害文化とも言える。日本列島は、4つのプレートが境するところに位置し、アジアモンスーン地帯の一部でもある。このため、地盤は脆弱で、地震、火山、風水害に度々見舞われてきた。これを学び、先人たちは災害危険度の高い場所を避けて集落を作ってきた。

名古屋も例外ではない。長らく、先人たちは南北に広がる熱田台地の上に住んできた。熱田台地は北に矢田川が削った崖が、西は堀川が境している。南端には熱田神宮が、北西端には名古屋城が位置する。熱田神宮は、三種の神器の1つ草薙剣を祀り、創祀1902年となる。周辺には縄文や弥生の遺跡もある。一方、名古屋城は、1610年に清洲越で、以前からあった城跡に城が造られた。清洲越も地震とは無縁でない。1586年に発生した大地震・天正地震で、五条川に隣する清洲城が甚大な液状化被害を被った。大坂の不穏な動きに対し、家康が清洲城に不安を感じ、台地の上に城を移した様子が思い浮かぶ。

名古屋の地形を見てみると、西が低く、東が高い。これは養老山地の下にある養老・桑名・四日市断層が何度も地震を起こし、断層の西側の養老山地を隆起させ、東側の濃尾平野を沈降させたためである。この結果、濃尾平野が西に傾く濃尾傾動地塊を

形作った。崖のような養老の山に滝ができたこと、平野は西が低いので木曾三川が養老の山にへばりつくように流れていること、平野の西側に海拔ゼロメートル地帯が広がっていることは、いずれもこの帰結である。

私たちの先輩たちは、熱田台地に居を構え、東の丘陵で山の幸や木を採り、台地の西でわき水を使って田を耕し、南の海や北の川の魚貝をとって生活してきた。かつては、熱田台地の西側に海が広がっていたため、「枇杷島」「飛島」「津島」「亀島」「笹島」などの島地名が西部に多数残っている。台地の周辺には、「波寄」「前津」「古井」「清水」「泥江」など、水辺やわき水に関わる地名が多い。一方、水が不足する東部には多くの溜め池があったため、「今池」「池下」「広池」「大池」などの地名が残っている。

江戸末期には5万人くらいだった名古屋のまちが、今では200万人を超える大都市となり、東西南北にまちが広がった。そのことは、災害の危険度が増していることを意味する。水辺は揺れ・液状化・水害の危険度が、丘陵地は土砂災害の危険度が高い。かつての日本人が持っていた、災害をわがことと思い、日頃から備える心を取り戻したい。

サロンの演奏会のありかた

座席数が約100席以下の小さい音楽会場が、そのサロンの特徴をいかして元気な活動をしている。名古屋の演奏会場、その中でも室内楽の演奏会場としては、「電気文化会館ザ・コンサートホール」「しらかわホール」「宗次ホール」がその中心で、加えて熱田、緑、名東、中村などの各区に配置されている名古屋市文化小劇場が利用されている。これらはそれぞれ300席以上の座席数である。その一方でこの数年約100席以下の演奏会場が少数であるが存在し、特徴のある演奏会を展開している。その個性的な演奏会のあり方が名古屋音楽界に定着してきた感があるので焦点を当ててみる。(まとめ：渡邊 康)

サロンの会場の利点

演奏会を開催する会場の座席数が少なければ、その経済的負担は比例して少なくなる。会場を借りる費用の他にも案内用のポスター、チラシ、チケット、当日の会場係の人件費など運営にかかる費用は想像を超える。演奏会を一般的な規模の300席以上の会場で行おうとすれば、演奏家個人の力だけで運営する事は極めて難しい。例えばチラシを演奏会のプログラムに挟み込むには、そのチラシのデザイン、印刷の手配、演奏会場に向いての折り込み作業などが必要で、枚数が多くなればその労力はますます多くなる。そこでそれらの仕事を専門的に引き受ける音楽マネージメント業者の力が必要となり、そこにも費用が発生する。

この部分の負担は特に実績のない若い演奏家にとっては極めて大きなものである。また多くの座席を埋めなければならないことや運営準備に対する精神的負担ものしかかる。それが小規模であればマネージメント業者に依頼しなくても個人の力でまかなえる範囲となるし、入場料も安価に設定できるメリットがある。気軽に演奏会を開催できる規模といえる。

さらに実際に小規模会場を使用する演奏家の意見を聴くと、また角度を変えた視点がそこにある事が分かる。こういった会場はオーナーの顔が見えるという事である。オーナーの音楽や演奏会に対するコンセプト、ひいては人柄が演奏者のそれと相まって音楽会のキャラクターに反映されていくのである。オーナーと直接対話する事で演奏家は自分がやりたい事を実現できる。座席の配置や舞台の道具や映像、音響、照明などの演出をフレキシブルに設定できる可能性が高い。練習にその会場を使わせてもらうことも比較的自由な場合も多い。大規模なホールであれば不可能な様々な自由度がそこにある。またオーナーが演奏会のプロデューサーの役割を果たしているということもあり、その存在が演奏家のモチベーションに直接つながる面もある。もう一回演奏会を開こうとする場合、プロデューサーの後押しが大きな力になる場合が多いのである。

さらに大規模なホールと違うのは、演奏舞台と客席が同じ平場であって近い事から生じる、音響的または音楽的な聴衆とのコミュニケーションが直接的であるという点である。大規模なホールでは観客と視線があわず、また距離があり、そのために音響的にはホールの空間を共鳴させる音楽表現が中心となる。対して平場でのサロンの空間では、演奏の音の振動が直接伝わり聴き手は迫力を感じるし、演奏家は聴衆の

反応を敏感に感じて、聴衆との一体感のなかで親密な音楽空間を造る事ができるという訳である。

フィオーレ

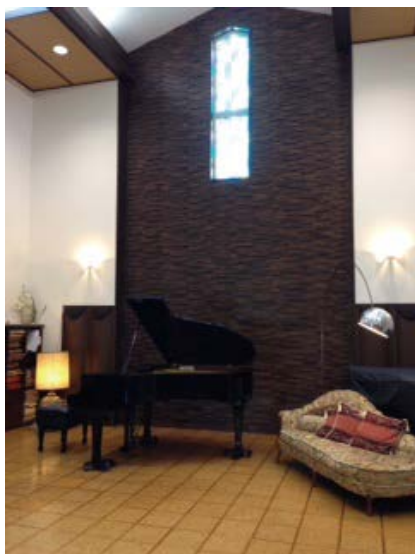
中村公園の大鳥居の近く、マンションの8階に「フィオーレ」はある。エレベーターで8階まで上がり、普通のマンションのドアが入り口である。平成19年の8月からコンサートができるサロンの空間、音楽スペースとしてスタートした。オーナーの長屋氏によれば、当初は気持ちのよい練習場として2階分の高さ、4mの天井高がある大広間を作ったが、現在では主にサロンパーティーができる演奏会場として稼働しているとのこと。80名収容可能なホールは窓からの見晴らしは良く明るい。座席が可動式なので演奏会のレイアウトの自由度が高く、また演奏会が終われば座席を撤去しての立食パーティーも可能である。会場の正面を変えたり、ピアノの位置を変える事で雰囲気が一変する。

最初は4mの天井高での響きが良いので、ギターやチェンバロ、リコーダーなどの古楽器に合うという事で、バロック音楽の演奏会や発表会に多く使われた。名古屋バロック音楽協会の例会、東海バロックプロジェクトなどの演奏会、名古屋パッサ・コレギウム倶楽部による鈴木雅明率いるパッサ・コレギウム・ジャパンの例会など、チェンバロを持ち込んでの演奏会で、くつろいだサロンの雰囲気が満点である。ヴァイオリニスト木野雅之のリサイタルは毎年開催される。愛知県立芸術大学の名誉教授のチェリスト天野武子やテノールの神田詩朗、准教授の中巻寛子などの音楽大学の教員の演奏会や学生の試演会、公開レッスンも数多く開かれている。



フィオーレ

スタジオ・ハル



スタジオ・ハル

地下鉄池下駅から徒歩10分ほどにあるスタジオ・ハルは閑静な住宅地の一軒家にある。玄関を入ると意外なほどに広く天井が高い空間が広がる。オーナーの松岡夫妻のお母様の練習室として建築されたその部屋には2台のピアノがあり、天井からはステンドグラスの光がこぼれる教会の礼拝堂のような落ちついた

雰囲気。2009年11月の名古屋フィルハーモニー交響楽団のチェロクインテットなど、名フィルのメンバーが数十席の座席数とそのサロニックな雰囲気の素晴らしさに注目して演奏会を始め、松岡氏の親戚でもあるピアニストの三輪郁のサロンコンサートが繰り返される事で演奏会場として知られるようになった。ヴァイオリニスト山口裕之を中心とした「カルテットフレスコ」、地元の作曲家と演奏家によるコンテンポラリー・ミュージック・アンサンブル「音楽クラコ座」は新作発表だけでなく現代の魅力ある新作を採り上げて熱心な聴衆を集めている。現代音楽の緊密なあり方に、さらに臨場感を高める空間である。ピアニスト五島史誉を中心にしたシューベルトの作品の連続演奏会「シューベルトティアード」は今年で10回を超えた。シューベルト作品のオリジナルなあり方を追い求める好企画である。

5/R Hall&Gallery

2010年10月に開館した5/R Hall&Galleryは1階が美術ギャラリー、2階が音楽ホールとなっている。地下鉄千種駅から南に徒歩2分ほどにあるこのホールは、前述した2つのサロンよりは大きな111席の規模である。コンサート・マネージメントの専門家が運営しており、主催・共催・協力公演のカテゴリーで音楽ジャンルの幅広い公演を連日開催している。既存のホールの小規模タイプというだけでなく、24時間練習可能なスケジューリングや演奏会のタイプに合わせた演出に柔軟に対応する運営が人気を集めており、木質感あふれる座席や内装は落ち着いたイメージである。この規模でこそ可能な細やかな運営をしていると感じる。筆者は2012年に画家磯部錦司の絵画との共作で、ギャラリー展示とコンサートのコラボレーション企画を行なった。コンサートでは約20点の作品をスライド映写し、コンピューターアプリを使用した4チャンネル音響作品を発表した。このような「美術ギャラリー」と「音楽ホール」を同時使用した実験的企画にも対応する柔軟さがあり、貴重な存在である。

メニコン ANNEX HITOMI ホール

こちらも千種駅に近い110席の音楽ホールで、企業が運営する。座席や内装は5/Rに似た平場で、高さの異なった椅子による客席となっており2台のピアノを備えて、楽屋とスタジオを兼ねた空間もあって、演奏会直前の音出しも可能である。ほぼレンタルホールとして機能しているが、リーズナブルな価格設定で利用申し込みが多い。数ヶ月先でも予約を取るのが困難なほどの人気は、活用しやすい条件が揃う表れであろう。ホワイエに十分なスペースがあり、講演会や映写会にも使用できる。筆者も学生の管楽器アンサンブル演奏会と公開レッスンに使用したが、暖かい雰囲気の中で展開できた。



5/R Hall&Gallery



メニコン ANNEX HITOMIホール

このようなサロニックな空間は、演奏家と聴き手の親しいコミュニケーションの場である。名古屋にこのような音楽のあり方が定着して、音楽文化が根付いてきた感がある。こうした音楽文化に関わる人々の暖かい会話が、深い文化の豊かさにつながるのであろう。

この人と...



造形作家・名古屋芸術大学教授

く の と し ひ ろ 久野 利博さん

自身の原体験からアジアの原風景をつくる

名古屋を拠点に国内外で発表を続ける久野利博さん。1990年代後半には国際展への出品など活発に活動する傍ら、1980年代後半から2004年まで、専任講師として関わる河合塾美術研究所内のギャラリーのディレクターとして、数々の展覧会を企画・運営してきた。現在は名古屋芸術大学デザイン学部教授として教鞭をとる久野さんに、作家として、企画者として、そして指導者として目指してきたものについて聞いた。

(聞き手:田中由紀子)

実家の店の記憶が原体験

「今日は誕生日なんです」というひと言から始まった今回の取材。久野利博さんは1948年、愛知県大府市生まれ。偶然にも取材当日は、67回目の誕生日だった。

久野さんの実家は、大府市と名古屋市で鶏肉店と玩具店を営んでいた。

「かしわ屋と土間をはさんでおもちゃ屋があり、畳の上におもちゃを並べて、外から見られるようになっていました。自



幼少の頃、実家の近所で

宅がおもちゃ屋でも、商品ですからそうそうは与えてもらえませんでした。いつもはガラス越しに見ているだけで、正月などに何か一つもらえる程度。いま振り返ると、この店の記憶が僕がこれまでやってきたことと深い部

分でつながっているように思えます。子どもころの原体験が、無意識に影響しているのではと思います」

そう言って見せてくれた初個展の写真に写っていた作品は、風景を凝縮した模型のようなイメージだった。

絵を描くのも好きだったが、同じくらい観るのも好きだったという久野さん。高校生のころには、ロダンの展覧会を観るためにわざわざ京都の美術館まで足を運んだこともあった。高校卒業後はいったん就職するものの、1年で退職して美大受験を目指すことに。

「仕事をしていても悶々とした日々が続き、半年くらい経ったころに美大に進学しようと決心しました。それで1年間はきっちり仕事をしてお金を貯め、翌年4月から受験準備のために予備校に通い始めました」

野水信に学ぶ

1971年4月に名古屋造形芸術短期大学彫塑科に入学。洋裁をしていた姉の影響から、ファッションやデザインにも興味があり、受験時にどの学部を専攻するか迷ったが、ファッションやデザインを目指すならまずは立体をと勉強し

始めたところ、立体のおもしろさにはまってしまったという。

大学では、彫刻家の野水信さんに学んだ。久野さん自身も22歳で入学したが、学内には浪人して入学した学生が多く、実際の年齢と学年が入り組んでいるため、学年をあまり意識することなく交流でき、また教える側もいい意味でいい加減だったという。



名古屋造形芸術短期大学2年生のころ

「僕が石を彫っていると、野水さんがそれを見て『どっちが作品だ?』と聞かれます。彫っている石と彫り取られた石のどちらが作品なのかと。僕が思わず言葉に詰まると、スーッと去っていく。もちろん彫っている方が作品ですが、そんなふうに聞かれると、手が止まってしまう。考えないわけにはいかなくなるんです」

野水さんの教育は学内に留まらず、学生を外に連れ出すことも多かった。

「ある時、野水さんが『ちょっと付き合い』と言うのでついていくと、稲葉地町のキャンパスから向かったのは、伏見の桜画廊でした。ちょうど野水さんの知り合いの作家の個展のオープニングで、そこで上の世代の作家を紹介してもらいました。技法を教えるというより、現代美術の現場を見せる。そういう生きた教育をする人でした」

作家になるという決断

久野さんに「作家になる」という意志を固めさせたのも野水さんだった。

「卒業後も制作を続けたくて専攻科を受験しようとした時に、野水さんが『専攻科に行って、君はどうするつもりだ? 作家になるんだろう?』と。僕はただ作品をつくりたかっただけでしたが、専攻科に行くなら作家としてやっていく覚悟を決めろと言いたかったんでしょう」

野水さんは学生に自身の制作の手伝いをさせることはなく、「野放し」というといい意味にとられないかもしれないが、学生を自分の型にはめるのではなく、一人一人の個性を伸ばす接し方をしていた。それが、いまの久野さんの学生への接し方にも影響しているという。

26歳で名古屋造形芸術短期大学専攻科を修了。その年の5月に、京都のギャラリー16で初個展を開催。それが久野さんの作家としてのデビューだった。そこから6、7年は、高校の非常勤講師やアルバイトをしながら、自身の制作を模索する時期が続いた。時代を台頭するコンセプチュアルアートに影響されたりもしたが、しっくりこず悶々としていたという。



1979年の田村画廊(東京)の個展会場にて。
陶芸家の伊藤公象さん(左)と

身体により空間を捉える

転機となったのは、29歳の時に初めて行ったヨーロッパ旅行だった。

「この時、さまざまな展覧会を見て、コンセプチュアルアートの考え方が日本とは違うことを感じました。時代の寵児だったヨーゼフ・ボイスに偶然出会い、ポートフォリオを見てもらったり。この旅行を契機に、塊としての彫刻から空間へと徐々に意識が変化していったんです」



(BODY DISTANCE)シリーズのポストカード

80年代前半の代表作〈BODY DISTANCE〉シリーズは、ある風景の中に久野さん自身が横たわる場面を撮影したモノクロの写真作品で、撮影された場所の地名と日付が書き込まれている。肩幅など自身の身体から割り出した寸法を使って空間をつくるといった、一連の身体表現的な作品を経て生まれた作品だ。

「身体を意識した作家、フランツ・エアハルト・ヴァルターの作品を知り、1979年くらいから特に身体を意識し始めました。〈BODY DISTANCE〉はその日、その場所の風景の一部に自分が関わり、自分の体を使って空間を捉えようとする試みから始めた作品です」

1980年に奈良の藤原京からスタートした〈BODY DISTANCE〉シリーズは、姫路城、浜松の中田島砂丘など国内のさまざまな場所で撮影され、1982年にはトレド、ピサ、フィレンツェ、ベルン、カッセル、東西ベルリン、ケルン、ブルージュなどで展開。

「当時はデジカメなどないので、焼いてみないとわかりません。一発勝負なわけです。一人で撮影するので、カメラの三脚を立てて行ったり来たり寝そべったりしていると、観光客が何かのパフォーマンスかと思ってわいわい集まってきて、撮影し終わると拍手されたりしました」

この作品をとおして自身の身体を尺度に空間と向き合った経験が、次のステップである空間全体を使ったインスタレーションへの布石となる。

ディレクターとして展覧会をつくる

1983年から3年間は、名古屋造形芸術大学で美術評論家の中村英樹さんの助手を務めた。学内にはDギャラリーという展示スペースがあり、ギャラリーの企画・運営にも関わった。この経験を活かして、86年からは河合塾美術研究所で専任講師として指導する傍ら、塾内にあるギャラリーNAFのディレクターとして十数年にわたり多彩な展覧会を企画。

「NAFでの企画で最も印象に残っているのは、1989年の世界デザイン博の会期に合わせて、名古屋市地下鉄すべての駅に手描きのポスターを展示したことです。アーティストやデザイナー32名に2枚ずつ描いてもらい、64か所に展示しました」

久野さんの意欲的な展覧会の企画によりギャラリーNAFは県内外から評価され、2004年まで関わることになる。自身の作品制作に取り組むだけでなく、作品を展示する、展覧会をつくるという立場で空間と向き合い続けた経験が、久野さんの空間を把握する力へと変換されたのは言うまでもないだろう。

アジア的な原風景へ

90年代になると、久野さんは展示スペース全体の空間の把握を意識し始める。1991～92年にサンタ・モニカ美術館（アメリカ）、ポートランド美術館（アメリカ）、タマヨ美術館（メキシコ）、ニューオリンズ現代美術センター（アメリカ）を巡回し、1992年に名古屋市美術館で帰国展も開かれた「セブン・アーチスツー今日の日本美術展」で発表したのは、夥しい数のビニール袋に砂を入れて円環状に積み上げた作品だった。ここではまだ円環の周囲と中の空間を見る者に意識させるに過ぎなかったが、1991年8月に開催された名古屋市民ギャラリー栄のこけら落としの展覧会を契機に、久野さんの作品は、展示室1室を丸ごと使ったインスタレーションへと展開する。



「セブン・アーチスツー今日の日本美術展」(1992年)
ニューオリンズ現代美術センターでの搬入風景

「それまでのロープなどを使用した身体的な空間の把握から、空間全体の把握へと移行したのは、身体におけるがんじがらめから逃れるためでした。身体をすべての尺度にすることが苦痛になり、それを回避する方法が空間全体の把握だったわけです。またそのころに、中華料理のお玉など古い日常の道具を空間に取り入れたインスタレーションができないかというアイデアが浮かんだんです」

久野さんが「小道具」と呼ぶ、鉄製のお玉や升、水甕、そして米。それらの多くは物を量ったり、すくったり、物の単位につながるものである。木でつくられたベンチなどと共にそれらが配置された部屋を巡ると、動線により空間が体感できると同時に、どこかアジア的で懐かしい気持ちが湧きあがる。また、骨壺、線香立て、灰、盛り塩などは神聖で呪術的な雰囲気も漂わせる。取材に伺った名古屋芸術大学内の久野さんの研究室のそこかしこには、作品に登場する小道具たちが置かれていた。

「小道具は旅先で偶然見つけた物が多いです。たとえば、黒いレーヨンの糸は黒髪のイメージ。水引できゅっと縛ると、

巫女さんの結髪のように見える。本来の用途から離れた小道具がどう化けるか。そこが新鮮でおもしろいんです」

こうした作品が評価され、1995年には第1回光州ビエンナーレ、1998年には第24回サンパウロ・ビエンナーレ国別日本代表に選ばれた。



1993年の桜画廊(名古屋)での個展にて

日本における国際展のあり方とは

ブラジルで1951年から行われているサンパウロ・ビエンナーレは、イタリアのヴェネツィア・ビエンナーレやドイツのドクメンタと並ぶ、国際展のひとつ。近年は国内でも国際展がブームだが、国際展への参加経験は久野さんにどんな影響を及ぼしたのだろうか。



第24回サンパウロ・ビエンナーレ(1998年)会場にて。
コミッショナーの山脇一夫さん(右)と

「中国や韓国のアートはその国独特のにおいがふんぷんしています。国際展では、どこの国かわからないと無国籍な感じになってしまう。その国の文化を出さないと意味がないのに、日本はそれを前面に出そうとはしない。日本の美術は構築的でない、曖昧模糊としているとしばしば言われますが、西洋の見方で日本の美術を見ること自体がおかしいと思います。自国の文化の底辺を大事にしていかなければ、そして、その精神を作品に表出していけないといけなく、国際展

への参加を通してあらためて思いました」

また、久野さんの言葉には日本における国際展のあり方について、考えさせられる点があった。国際展の目的は、海外の現代美術を自国に紹介し、国民が世界の最新のアートシーンに触れることができるようにすることであると同時に、自国を国際的な美術の中心の一つとすることといえる。

「サンパウロも光州も、国際展を開催することで、自国のアーティストを世界に送り出そうという視点を持っていますが、日本の国際展にはそういった視点を感じられません。海外のアートをありがたがっているばかりでなく、日本のアートを世界に発信していく視点を持つことが大切だと思います」



愛知県芸術文化選奨文化賞授賞式(2010年)会場にて。
当時、愛知県知事の神田真秋さん(中)と

指導者として伝えたいこと

現在は作家活動の傍ら、名古屋芸術大学デザイン学部で教鞭をとる久野さん。指導者として大切にしていることを最後にお聞きしてみた。

「すべての学生が作家になれるわけではありません。また仕事としてアートに関われるわけでもありません。近年は女子学生が多く、将来的には家庭に入る人もいるかと思

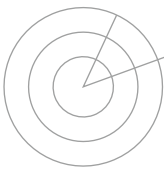
います。その時に、大学で学んだ美的感覚やセンスを家庭生活に活かしてほしい。それは子どもの価値観にも影響を及ぼします。ものを見ることから生まれる豊かさを、次の世代に伝えていける人材を育てること。それこそが美大の使命だと思っています」

久野さんの作品が、アジアに生きる私たちの原風景であると同時に、見ることの豊かさを感じさせてくれる理由が、この言葉から理解できた。



久野さんの研究室に置かれた
「小道具」たち

ピックアップ



同人誌は新しい



122号表紙

『中部児童文学』122号(2015年2月発行)の充実ぶりに目を見張った。270頁超の誌面に長編と短編の創作が各3編と連載評論1編が並ぶ。創作は子どもたちを取りまく学校や家族の問題に取り組んだ作品から、架空の地を舞台に、戦火を逃れ小村に逃げ延びた王妃と王子

がたどった数奇な運命を描くものまで変化に富み、いずれも読みごたえ十分だ。

同誌の創刊は1958(昭和33)年9月。当初の誌名は『中部童話作家』で、4年後の1962年に『中部児童文学』に改題されている。おりしも時代は童話から児童文学への転換期にあたり、誌名変更にもそうした動きが見て取れる。創刊に尽力したのは名古屋市職員として社会教育の仕事に就いていた都島紫香(1911~1979年)。戦前から口演童話家として活躍し、『子供の街』(1938年1月創刊)など同人誌活動を精力的に展開していた都島は、戦後も引きつづきこの地で児童文学・児童文化の普及と啓蒙、関係者の組織化に尽力した。氏の人柄や功績は「都島紫香氏追悼号」(『中部児童文学』40号、1979年9月)に詳しい。

『中部児童文学』は中部児童文学会の機関誌でもある。会長の井上寿彦さんにお話を伺った。現在の会員は33名。40~50代の女性を中心だが30代の男性もあり、幅広い年齢層からなる。創刊時からの90代の会員も活躍中で、121号にはご自身の体験に基づく作品「五月十四日のデート」を発表し、中日新聞にも取りあげられた(「戦後69年 戦火が裂いた恋 小説に一中川の

齊田さん、幼なじみがモデル」2014年9月14日朝刊)。活動の中心は年2回(2月、8月)の同人誌発行のほか鶴舞中央図書館等を会場に開催する月例会で、機関誌の合評や外部講師を招いての講演会を実施するかたわら、「実作」と称する会員の新作批評を継続的に行っている。「実作」はほぼ毎月のペースで提出されるといい、



例会の様子(2015.5)

批評を受けて書き直したものが同人誌に掲載されることも多いそうだ。同人誌発行後には再び月例会で合評が行われるので、作品は繰り返し批評の眼をくぐ

るなかで磨かれていく。「力のある人、つけつつある人が多いです」との言葉はこうした実践に裏付けられているのだろう。

同人誌の意義も児童文学のあり方も大きく変わりつつあると言われて久しい。井上さんは「〈児童文学〉を意識して書くのはもう限界ではないか。書きたいことを自由に書くことで新しい方向が見えてくるのではないか。それができるのは今や同人誌だけではないかと思っています」と話してくださった。自由を強みとする同人誌は、既成のジャンルを超えて新しい作品を生み出す可能性を持つ。同人誌は創作の最前線であり、いつも新しい。(M)

問い合わせ先

中部児童文学会
名古屋市天白区井口1-107 ヴィラカジカワ301
高橋一元方 中部児童文学会事務局

いとしの サブカル

覚王山の街づくりとアート

陶芸作家／コーディネーター

すずき めぐみ

1972年 名古屋市生まれ。1995年 名古屋芸術大学卒業。出版社を退社後、陶芸を始め、覚王山の街づくりに関わり始める。2008年に覚王山アパートに「古本カフェ ソボクロ」を開店。その後も、古本カフェやギャラリーなど、数々のイベントを企画・開催。覚王山の街づくりは1997年より今もなお継続中である。

覚王山の街に関わり始めて20年近くになります。今ではオシャレで高級感のある町「覚王山」というイメージもあるようですが、当時は広小路の拡張工事で商店が大幅に減り、街は衰退の一途…。世の中の的にも商店街が大型店にやられてひん死の状態。そんな時に登場した“町おこしブーム”。どこの町にも行政から補助金がおおりて、町おこしのプロフェッショナルというコンサルタントが派遣され、どこでやっても同じようなイベントや空き店舗対策が行なわれていました。そんな中で覚王山は、自分たちの独自のアイデアで面白い祭やイベントをやってきました。メンバーに商店主だけでなく、覚王山在住のイラストレーターやデザイナーがいた事も大きかったと思います。初期の活動の一つにマップ作りがあります。「可愛い絵の街のマップを作って無料で配布しよう!」「部屋にでもトイレにでも貼ってもらえて、捨てられないマップを作ろう!」という想いで作り、それが話題となりました。他には、年3回開催される「覚王山祭」。今ではどこでも目にするようになりましたが当時では珍しい、“手づくりのもの”を売るフリーマーケットの先駆けとなり



ました。そして年1回開催する「参道ミュージアム」。これは、街の中に一般から募集した作品（主に立体）を町中に飾って楽しむというイベントです。世界的に有名なアーティストが美術館や野外で繰り

広げるアート・トリエンナーレやピエンナーレのまねごと(?)のようなイベントです。これが結構楽しいのです。参加者はもちろん有名なアーティストではなく、半分素人。展示の場所は覚王山商店街。なんでも



作ったものを飾れば良いということではなく、“場所ありき”の展示をスタッフや店主とのやり取りを繰り返し、制作してもらいます。観覧者は“美術なんてよくわからない”という街の人やお客さんたち。そんな中で、作品を介してコミュニケーションが生まれ、人が繋がります。始めはこのイベントを理解してもらえなかった店主や住人の中にも、回を重ねるうちに楽しみにしてくれている人が増えました。もちろん作品のレベルがどれも高いとは言えませんが、顔なじみのアーティストたちが自腹を切ってお金にもならない、くだらないこのイベントのために楽しんで時間を費やしてくれる。これだけでも充分面白いことだと思っています。覚王山の街は、お祭りやイベントを重ねるごとに、アーティストと店主とお客さんの距離が縮まり、街に面白い人が集まります。“覚王山でお店をやりたい”、“覚王山に住んでみたい”と言う人も出てきます。それが新店舗となり、街のメンバーが増えていく。それが繰り返されて今の覚王山があるのだなあとと思います。覚王山でしかできないこと、覚王山が好きだからできること。お金だけでなく、やっぱり人の気持ちが大事ですね。

なごや子どもまちかど文化プロジェクト

金山ぐるり タイムトンネル2015

～明治大正 アート・あそび・たび～

期間 平成27年8月7日(金)～9日(日)

場所 日本特殊陶業市民会館、金山南ビル
(1階インターコモン、14階名古屋都市センター)
金山総合駅連絡通路橋、アスナル金山

「“ぐるり券”を片手に、明治大正のたいけん旅にでかけよう！」

明治大正ろまんちっくコンサート

～セントラル愛知交響楽団×
宝塚歌劇団OGによる夢の競演～

明治大正時代に日本にやってきたオーケストラを体感できるコンサート。1部は西洋から伝来したクラシック音楽の有名パトリーを中心に贈りし、2部では大正時代発祥の宝塚歌劇団より雪組の元トップスター・平みち、雪組元トップ娘役の紫とも等、宝塚OG4名がオーケストラをバックにレビューショーを披露します。

- 日時 / 平成27年8月7日(金) 17:30
- 場所 / 日本特殊陶業市民会館 フォレストホール
- 料金 / 全指定席 1,500円

～劇団うりんこによる、謎解き体験型演劇～

名探偵!山田コタロウ

劇団うりんこによる、金山ぐるりタイムトンネル特別バージョン「名探偵!山田コタロウ」の公演。来場してくれた子どもたち全員にオリジナル缶バッジをプレゼント。この缶バッジを使って、劇に出てくる謎を一緒に解いてもらう「謎解き体験型演劇」。客席と出演者が一緒になって物語を進行していく新感覚!の演劇です。

- 日時 / 平成27年8月9日(日) 13:30 / 16:00 (2回公演)
- 場所 / 日本特殊陶業市民会館 ビレッジホール
- 料金 / 全指定席 900円

金山アート博覧会

アートや芸能、文化や技術を感じ、体験するワークショップ。「のりもの柄のTシャツをつくろう!」、「ジャグリング&玉乗りにチャレンジ!」など全12プログラムを開催。(定員各30名、対象年齢有り)

- 日時 / 平成27年 8月7日(金)～9日(日)
① 11:00～12:30
② 14:00～15:30
- 場所 / 名古屋都市センター会議室
- 講師 / プレジャー企画、中根理、タクマ 他
- 料金 / 各500円



主 催: なごや子どもまちかど文化プロジェクト実行委員会
(構成団体/名古屋市、公益財団法人名古屋文化振興事業団、公益財団法人名古屋まちづくり公社、中日新聞・中日子どもウイークリー)
後 援: 名古屋市教育委員会
監 修: 前田ちま子(名古屋芸術大学教授)
お問い合わせ: なごや子どもまちかど文化プロジェクト実行委員会事務局(名古屋文化振興事業団内) TEL:052-249-9387 FAX:052-249-9386

公演のチケット取扱いや「金山アート博覧会」の申し込み方法など詳しくはホームページをご覧ください。 http://www_time-tunnel.org/

アイデアを広げる
ワンランク上の印刷を

事業内容

- UVコールドフォイル印刷
- UVホログラム転写印刷
- UVコーター付オフセット印刷
- 一般オフセット印刷
- 3D印刷
- バリエブル(可変データ)印刷
- Mac・Win・DTPデータ作成
- B倍プロッター出力

鬼頭印刷株式会社 Tel.052-681-1701 Fax.052-679-1171
〒456-0073 名古屋市中区熱田区千代田町3-22 data@kito-net.com www.kito-net.com

舞台映像専科

ステージの感動を格調高い映像で追求します。
ハイビジョンで撮影し
ブルーレイディスクでお渡しします。

ビデオソフトの企画制作

有限会社 **エーワン・ビデオ・システム**
TEL(052)896-2256 FAX(052)896-4100

WE MAKE YOU MOVE
感動をあなたへ

この領域を超えて最高のパフォーマンスを。

20Hz ← → 20kHz

A&V
PRO AUDIO & VISUAL & NETWORK

舞台音響・映像設備
設計・施工・保守・特注品製作・業務用機器販売

お客様に寄り添った先進のAVシステムを提案する
株式会社 エーアンドブイ
〒464-0846 愛知県名古屋市中区千種区城木町二丁目98
TEL/052-761-5400 FAX/052-761-0909

「ナゴヤ劇場ジャーナル」ではサポート会員を募集しています。

ナゴヤ劇場ジャーナル

◎年間6,480円で毎月お手元にお届けいたします。
◎毎月24,000部発行 ※東海地方の演劇・パレエ・音楽公演、各所顧客DM、他に配布

公演・発表会の受付から制作業務全般まで、何でもご用命下さい

MP MANAGEMENT PRO 株式会社 マネージメント・プロ
〒464-0850 愛知県名古屋市中区千種区今池1-14-11 CASA LUZ302
TEL (052) 735-3151 FAX (052) 735-3152 E-mail : mpoffice@pa2.so-net.ne.jp

業務内容

- ①舞台の企画・制作マネージメント
- ②イベントの企画制作
- ③芸術団体のコンサルティング
- ④舞台・イベントの運営